



作家の三浦綾子さんが、(キリスト教において)人間が生まれながらに持つ「原罪」を題材に描いた傑作『氷点』。その続編となる『続・氷点』がドラマ化されたとき、ヒロインの座を見事に射止め、瞬く間にスター女優となられたのがこの人でした。
圧倒される美しさ、媚を感じさせない凛とした佇まい。その後、数々のドラマや映画で活躍された女優の島田陽子さんが、7月25日に都内の病院で亡くなりました。享年69。死因は、大腸がんによる多臓器不全との発表です。島田さんは3年前より、がん闘病をされていたとのこと。
報道によれば、島田さんは手術や抗がん剤治療を選択しなかったのだとか。医師からは人工肛門(ストーマ)の増設を勧められましたが、これも拒否されたそうです。「女優魂」と書かれていた記

266 女優 島田陽子



女優ゆえの葛藤ならせつない

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

事も読みましたが、もしも、女優だからという理由で人工肛門を拒否されたのなら、せつない話です。
現在、我が国で人工肛門を造設している人はおよそ20万人。肛門

がんや、下部直腸にがんができて肛門やその周辺も切除手術する場合、新たな便の出口を作らねばならないので人工肛門を造設します。人工肛門になると、排泄のための神経や筋肉がないので、コントロールするのが難しくなりますから、便を溜めておく専用の袋(パウチ)を取り付けることになります。慣れるまで少々時間はかかりますが、装具は日進月歩で進化しており、適切に使用している限り、漏れたり、臭いがあることはまったくありません。

普通にお風呂に入ることもできませんし、温泉旅行も大丈夫。僕が診ている在宅患者さんは、ゴルフや筋トレなどを楽しんでます。装具の交換は、一般的に週に2〜3回。高齢でうまく自分で交換できないという人には、専門知識を持った訪問看護師がしっかり管理します。

人工肛門であることを発表した有名な人といえば、一昨年亡くなった俳優の渡哲也さんのことが思い浮かびます。人工肛門への理解がほとんどなかった20年も前に、これを公表した渡さんの勇氣に、多くの患者さんが励まされました。社会の偏見を变えることができて、私も、大スターだからこそ。

島田さんも、治療をするかしないか、大きな葛藤があったのかもしれない。それを想うと胸が痛みます。無論、「しない選択」を否定するつもりはありません。何をもち「尊厳」と考えるかは、人によって違います。しかしどんな尊厳も、否定しない社会であってほしいです。